【別紙資料①】

報道機関各位

プレスリリース

令和３年８月 11 日
独立行政法人国立青少年教育振興機構
青 少 年 教 育 研 究 セ ン タ ー

# 子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究
## ～「読書離れ」の実態と、「読書好き」を育てるヒント～

国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センターは、子どもの頃の読み聞かせや読書活動の実態、読書活動が大人になった現在の意識・非認知能力に与える影響、それに読書活動を形成する要因を検証するために、全国の 20～60 代の男女 5,000 名（各年代男女 500 名ずつ）を対象にインターネット調査を実施しました。

また、子どもの頃の読書活動と認知機能との関連について、大学生を対象に分析し、多面的に読書活動の効果を検証しました。

**■調査結果のポイント**

① 子どもの頃の読書量が多い人は、意識・非認知能力と認知機能が高い傾向がある。

② 興味・関心にあわせた読書経験が多い人ほど、小中高を通した読書量が多い傾向にある。

③ 年代に関係なく、本（紙媒体）を読まない人が増えている（平成 25 年と平成 30 年を比較して）。

④ 一方で、スマートフォンやタブレットなどのスマートデバイスを使った読書は増えている。

⑤ 読書のツールに関係なく、読書している人はしていない人よりも意識・非認知能力が高い傾向があるが、本（紙媒体）で読書している人の意識・非認知能力は最も高い傾向がある。

**【ポイント】 『非認知能力』 とは、**

**●目標や意欲、興味・関心をもち、粘り強く、仲間と協調して取り組む力**

**●“学力以外”の幅広い能力をさし、目まぐるしく変化する社会情勢に対応する力**

➢『非認知能力』は、
“心の土台”の様なもので、この土台がぐらつくと、小・中学校でたくさんの教育を乗せられた時に、支えきれず自分のものにできなくなります。

**幼少期に、**
**“しっかりとした土台”を**
**作っていくことが大事です!!**